



題字 初代学長・森本静子先生

第59号(特別号)

発行所 〒164-8638
 東京都中野区本町6-38-1
 新渡戸文化学園同窓会
 電話 03-3381-0196
 (内線 2232)
 FAX 03-3381-7866
 dosokai@nitobebunka.ac.jp
 発行人 森本 晴生
 編集人 森本 光生
 印刷所 山藤三陽印刷(株)

学園同窓会は、新渡戸文化学園とその前身に属する学校の卒業生の組織です。専門部、短大部、医技部、B A部、高女・中高校部、小学校部の六つの部会に分かれています。(1) 会員相互の親睦をはかること、(2) 会員の知徳を高め社会に貢献すること、(3) 母校の隆盛をはかること、が同窓会の目的です。二年に一度開催する総会の年が、学園創立九十周年に重なるので、同窓会機関誌「泉」の特別号を発行し、心からの祝意を表するものです。

祝 学園創立90周年

学園長・同窓会会長 森本 晴生

一九五二(昭和27)年に始まった医学技術学校は、医学技術専門学校となり、いまの短期大学の臨床検査学科に続いています。

一九三一(昭和6)年に中野にあった成美高等女学校を引き受けて女子経済専門学校附属高等女学校とし、のちに新渡戸文化高等学校と新渡戸文化中学校になりました。

一九四六(昭和21)年に東京経専幼稚園が入園式を行い、翌年に認可を受けて形式上の整備を行いました。さらに、東京文化幼稚園を経て、新渡戸文化幼稚園(子ども園)となりました。

一九四八(昭和23)年に東京経専小学校が始まり、東京文化小学校を経て、新渡戸文化小学校になりました。

今日の設置者は学校法人新渡戸文化学園、各学校はすべて共学です。短期大学には、生活学科(食物生活専攻と児童生活専攻)と臨床検査学科があります。そのほかに、コース制の高等学校、中学校と小学校が一つとなった小中学校、子ども園、アフタースクールがあります。

新形式の短大部会

49・50歳 全員集合

短大幹事長 富士ひろみ

一年おきに行う短大部会を、今年から二学年合同学年会にいたしました。

対象年齢は、子供の手も離れ、

少し自由な時間が取れそうな四十九歳、五十歳とし、今回は昭和六十二年度、六十三年卒業の方を学園に無料招待し、思い

出のひと時を過ごしていただくことにしました。

初めての企画で、来ていただけたか不安でしたが、ご案内状は二学年で住所の判っている三百余名に出し、三十名が来てくれました。中にはハガキの届かないお友達を誘ってくれ、人数も増え助かりました(写真上)。

今年の開催日は、三月四日(土)にしました。この日は中川悦先生の八十七歳のお誕生日です。お誕生日のことは中川先生には秘密にし、お忙しい中、来ていただきました(写真下)。サプライズでケーキでお祝いし、「小羊会」



「むつみ会」、「短大部会」から記念品を差し上げました。

またこの三月で定年を迎えられる大島恵子先生には、「短大部会」から記念品を差し上げました。

近況や学園の思い出話を伺っていると、年齢の違う私も、先生方からの教え、調理実習のこ

と、3日精神、どれも同じ時間を共有した錯覚を覚えました。

また、子どもを育てるうえで食事の大切さを改めて感じました。二年後の次回には、平成元年度、二年度卒業の方を招待いたしますので、該当の方々はお誘いあわせの上、奮ってご参加ください。

一泊国内旅行

二〇一六年十一月十九日、雨の降る中を新宿駅前より出発。

一日目、ワイナリーでの試飲、信玄餅工場での詰め放題、昼食

は、ほうとう田舎料理に舌鼓。

武田信玄の館跡の武田神社に参拝ののち、宿泊地の、石和温泉常盤ホテルに到着(写真)。

二日目は、里の駅いちのみや

で、野菜詰め放題、昇仙峡では

ロープウェイに乗り、パノラマ

台では、前日とは打って変わり、

晴天に恵まれ、展望台からは遠

くに富士山が望めた。昇仙峡を

歩いて、滝と岩を見ながら下り、

昼食の「さわらび」では、炭火

焼「おざら御膳」を賞味。全員

無事に、帰路についた。

短大部会に出席して

短大63卒 橋本恵理子

土曜日のお昼から第2カフェテリアにて懐かしく、楽しい時を過ごすことができました。卒業以来母校を訪ねるのは初めてという方が殆どでした。中川先生、大島先生、原先生がお見えになりました。ご用意いただいたお弁当を食べながら話しているうちにだんだん当時に戻ります。中華の調理実習の時シンクに

本年は、日帰り旅行を九月三〇日(土)に予定しています。ふるってご参加ください。



鯉が泳いでいて驚いたこと、家でオムレツを作る時は、中川先生のお顔が浮かんで来ると話す方もいました。各自近況を報告し合う中で、食や栄養に関する勉強をしたことが仕事や家族のためになっているという方、学生当時の思いを今後の生活に取り込んでいこうと気持ちを新たにする方など様々でした。

この同窓会を企画段階から当日までご準備下さった先輩方、先生方には感謝の気持ちで一杯です。有難うございました。



リブラ会幹事会 (2017年3月)

リブラ会総会

九月二十四日(日)

桃園校舎の集いに参加しよう

リブラ会幹事長 小栗豊子

本年のリブラ会総会は標記の日に新渡戸文化短期大学臨床検査学科の中野校舎(旧桃園校舎)で行うことに決まりました。母校を懐かしみ、ぜひご参加ください。

さて、リブラ会の会員も三千六百四十四名と大所帯になりました。私たちは臨床検査技師のそれぞれ分野で分科会を開い

ており、先輩は後輩にとってよき相談相手であり、また、同世代同志はライバル意識をもって勉強したものです。私は細菌・血清検査の分科会に所属しており、月一回、平日の夜、講師は会員または外部の先生をお呼びして会員の施設の持ち回りで、懇談の会を開いております。お茶とお菓子を食べながらの気楽な楽しい会でした。

臨床検査の分野で秀でた方々に贈られる小島三郎技術賞があります。この受賞はリブラの分科会とともに勉強し、競り合い、励まし合ったことが大きく関与していたと思います。学会や研究会で同じ分野に属する先輩・後輩がもっと親密になり、声をかけられるようにできたら素晴らしいと思います。九月の総会は、これら実現の一步にしたいと思います。同窓生が先輩・後輩のさすなを強めることは学園の発展のためにも不可欠な条件です。

リブラ会の役員は幹事長のほか副幹事長三名の四名体制で行っており、全体の同窓会の活動にはさらに会員のご協力をいただいております。役員は若返り、多くの会員に経験していただくのがよいとの意見も聞かれます。このためには学年幹事の方が同窓会の行事に参加していただく必要があります。

伝統ある新渡戸文化短期大学臨床検査学科を盛り上げてゆくために未来を支える若い方々のご参加をお願いいたします。各自の職場で、地域で、お誘いあわせの上、ご参加ください。

本学園卒業生数 (2017年3月)

	卒業生数	同窓会入会者
小学校	60名	60名
高校	34名	31名
短大生活学科	126名	124名
短大臨検学科	67名	66名
合計	287名	281名

ひとつの学校を卒業すると、その段階で同窓会に入会しますので、卒業生数と入会者数には若干の差があります。



第66回短期大学卒業証書・学位記授与式 (3月10日)
卒業式では着物袴の卒業生が大勢になりました。



桃園校舎の正門(上)とパティオ(下)

桃園寮から臨床検査学科へ

現在、臨床検査学科のある中野臨検キャンパスには、かつて桃園寮があり、短大生が生活していました。由緒ある洋館と付属する日本家屋が初期の桃園寮の姿でした。当時の森本静子学長もこの地に住居を構え、寮生たちを指導しました。医技の初期の卒業生には、桃園寮で暮らした人もいます。1987年に桃園寮が閉寮となり、その地に医学技術専門学校が東高円寺キャンパスから移転してきました。中野駅から至近で、校舎の屋上に上ると、中野駅周辺の高層建築が間近に見えます。

第三回成人を祝う会

むつみ会幹事長 榎本良子
小羊会 幹事長 能村佳子

むつみ会開催の成人を祝う会も、各校校長先生、教職員の皆様や、幹事会幹事の皆様のおかげで、今年で三回を迎えることができました。また、かねてより検討していました小羊会との合同の成人を祝う会を実現でき、今回初めて記念すべきお祝いの会が持てました。

当日の一月十四日(土)は、

むつみ会からは三十二名、小羊会から二十名の新成人の皆様を迎えました。森本光生・小松洋子同窓会副会長や同窓会各部の幹事長・副幹事長並びに、佐藤善一校長先生、朝倉寿夫小中学校校長先生や、卒業生にとって懐かしい諸先生方にもおいでいただきました。

今年からは、小学校卒も参加し、昨年までとはまた一味違う新鮮さがありました。若々しく希望に満ちた新成人たちの笑顔は明るくみずみずしく、最後は中高と小学校の校歌をみんなで歌い、新渡戸祭やその他今後の同窓会への活動に、若い卒業生たちのご協力と知恵を貸していただきたいとお願いし、この会がますます発展することを願い、閉会となりました。



当日の一月十四日(土)は、むつみ会からは三十二名、小羊会から二十名の新成人の皆様を迎えました。森本光生・小松洋子同窓会副会長や同窓会各部の幹事長・副幹事長並びに、佐藤善一校長先生、朝倉寿夫小中学校校長先生や、卒業生にとって懐かしい諸先生方にもおいでいただきました。

りました。

素敵な笑顔の仲良し三人が受付(上段)。朝倉寿夫小中学校長、各先生方、同窓会役員を囲み、新成人の方たちの笑顔がはじけます(中段)。むつみ会新成人の近況報告(下段右)。小羊会の思い出の写真(下段左)。



小羊会よりお知らせ

本年度の小羊会は次のように開催します。

日時…七月一日(土)午後二時
場所…小学校ランチルーム

既報ですが、昨年の小羊会

(二〇一六年六月二五日開催)

は約九十名の参加を得て、成功裏に終了しました。学園同窓会からも、幹事長の皆さんが応援に来て下さいました。

今年の小羊会にも、昨年以上の小学校卒業生の参加をお待ちしています。

また、本年一月十四日の成人を祝う会では、56期生たちが校長先生、担任の有馬先生などの先生がたと一緒に大きなテーブルを囲み、ご馳走をいただき、大いに歓談しました(写真上)。

来年一月には、57期生の新成人をお招きする予定です。



同窓会
事務室より

同窓生名簿の整理更新

卒業学校ごとの名簿でしたが、同一人がいくつもの学校のページに載ることになり、訂正がうまくいきませんでした。二〇一六年に、処理能力のある新しいパソコンを導入し、全卒業生を一つの名簿といたしました。これで、訂正の場合は、一か所を直せばよいことになり、名簿管理が簡単になりました。

『泉』や『新渡戸文化タイムス』、その他の同窓会からのご案内で、お気づきの点は、お知らせください。

学園に特別寄付

二〇一六年五月に、学園ホームページ上の教育環境・設備整備のための寄付依頼に応じて、同窓会から学園に五十万円の寄付をいたしました。

同窓会の奨学金

同窓会では、貸与の奨学生を募集しています。対象は、「短期大学、高等学校に一年以上か

つ最高学年に在学し、修学年限で卒業の者(学習態度・出席状況・生活習慣・健康面などから見て卒業できるもの)。本人及び保護者が本学園での就学を切望するもの」と定めてあります。希望の方は、高等学校、短期大学にご相談ください。

ドローン空撮

創立九十周年を記録するため、学園の写真をドローンで撮りました。三月十三日に、ドローン・パイロットの川會申二カメラマンが来校し、二時間かけて撮影しました。

一面は、ドローン空撮を聞きつけて、学校にいた小学生、中学生、高校生がガーデンに集まってきたところです。みんなドローンに向かって手を振っています。三面は中野キャンパスの



ドローンを囲んで、佐藤善一高校長、朝倉寿夫小中校長、森本光生副会長。



ドローン写真です。この五面の最下段、六面、七面、八面の写真もドローンによります。

ドローン目線の写真。(左) 小学校からアフタースクールに連絡する「おくら門」(右) 正門

学園九十年の歩み

一・創立から終戦まで

学園の歩みは、前身である女子文化高等学院が創設された一九二七(昭和2)年から始まります。

校舎は「文化アパートメント」の敷地内にありました。

文化アパートメントは森本厚吉先生が組織した、文化生活普及会「後に文化普及会」によって建設された、日本初の洋式集合住宅です。一九二五(大正

十四)年に東京市本郷区元町一丁目(現文京区本郷二丁目)に竣工、翌年に開館されました。二〇一六(平成28)年前期の朝の連続テレビ小説「とと姉ちゃん」のヒロインの会社(暮しの手帖社)も入っていた建物です。

一九四二(昭和17)年に日本出版文化協会に譲渡されるまで、学園の歴史とともにあり、一九八六(昭和61)年に取り壊されるまで、建物(日本学生会館)は活用されました。

文化アパートメント竣工からさらに数年前、厚吉先生は、月刊雑誌「文化生活」を発行して

います。当時の誌面には今後の日本や女子教育への意見が掲載され、学園の原点が大正時代の半ばからあったことが伺えます。学園の歩みに戻りましょう。

一九二八(昭和3)年、財団法人女子経済専門学校が設立されました。理事長は森本厚吉先生。そして、厚吉先生の強い願いに応え、校長に就いたのが新渡戸稲造先生でした。

厚吉先生は札幌農学校で学んでいたとき、新渡戸先生の指導を受けています。また、新渡戸先生が学んだアメリカのジョンズ・ホプキンス大学には、厚吉先生も留学。研究者の中で、厚吉先生は新渡戸先生の愛弟子とされ、新渡戸稲造について知ることとは森本厚吉について知ることであり、逆もまた然り、といわれています。

一九三一(昭和6)年、成美高等女学校を女子経済専門学校に合併し、女子経済専門学校附属高等女学校と改称しました。校長は同じく新渡戸先生です。

この年は「教職員心得」が制定された年でもあります。教職員心得は親心を以て教育

にあたるよう説くなど、全部で九つの項目からなります。今も学園の教職員が勤務初日から受け継いでいます。なお、「親心」という単語は、新渡戸先生が作った言葉だという研究もあります。

さて、一九三二(昭和7)年には附属高等女学校で希望者を対象に給食が始まりました。現在も力を入れている給食は、八十五年前にさかのぼるのです。そして、同じ年に附属高等女学校校友会誌「いづみ」が創刊されました。

新渡戸先生は学生との交流も大切になさるつつも、国際的な仕事に多忙でした。一九三三

(昭和8)年、カナダでの太平洋会議のために日本を出発し、会議を終え、十月一六日に客死されました(享年七十一歳)。この後、専門学校・附属高等女学校長職は、厚吉先生が受け継ぎました。

一九三四(昭和9)年、当時設置していた専門学校は、本郷から中野に移転します。一九三五(昭和10)年には新渡戸記念講堂が完成しました。

時代は徐々に戦争に向かい、繰り上げ卒業式が行われたり、卒業生女子挺身隊が組織されたり、また、「経専タイムス」としていた機関誌名は「経専学報」と名称を変えました。

そのような中でも学園は前向きに運営され、一九四三(昭和18)年には中野区桃園町、同本町通六丁目に土地を購入、桃園寮を開設しました。一九四四(昭和19)年は附属高等女子高五年生が女子挺身隊として出勤した年でもあり、東京女子経済専門学校



1934(昭和9)新渡戸記念館が落成(第一次)。二年後に内部を消失した後、1937年に新・新渡戸記念会館が完成、戦災を生き残り、今日まで学園の教育の中心です(現在は、一号館)。

二・再建から創立四十周年まで

校と改称し、経済科・育児科・保健科の三科制となった年でもあります。一九四五(昭和20)年八月、日本は終戦を迎えます。記録によると、翌九月には、授業が再開されました。

終戦翌年から厚吉先生は再建に力を注ぎました。一九四六(昭和21)年に専門学校に英文科ができ、東京経専幼稚園が開園されました。一九四七(昭和22)年には、東京経専附属高等女学校を東京経専中学校と高等学校に改組し、東京経専中学校が開校されました。一九四八(昭和23)年には、専門学校育

児科・保健科を家政科に統合、東京経専高等学校・東京経専小学校が開校されました。いずれも校長は厚吉先生でした。一九四九(昭和24)年、八号館(八教室)が完成します。

創立から戦前戦後に全力を尽くした厚吉先生でしたが、一九五〇(昭和25)年一月三十一日、帰天(享年七十三歳)。

厚吉先生亡き後、校長・園長を継いだのは奥様の森本静子先生でした。静子先生は一九二七(昭和2)年に女子文化高等学院が創設されたときに院長に就かれ、以来、学園を支えていら



1997(平成9)年中庭を緑化し、「ガーデン」と呼ぶようになりました。写真上から、学園のモットーのHead(活く頭)、Hands(勤しむ双手)、Heart(寛き心)が書かれていますが、木が大きくなって字が隠れてしまいました。

上: 6号館(小中・高) 右: 7号館(体育館)
左: 1号館(短大)

したのです。
厚吉先生が亡くなった年、東京文化短期大学家政科が開学、学長は静子先生でした。この年は、東京文化高等学校・中学校・小学校・幼稚園と改称した年でもあります。今は体育館がある場所に、七号館が建てられました。

この後、今の食育・栄養に関する取り組みの時期となります。一九五七(昭和32)年、短期大学食堂給食施設管理専攻科が開始され、またカフェテリア営業も始まりました。翌年から連続で東京都から表彰されたのを誇らしく思った方も多いのではないのでしょうか。

文化普及会は解散、所有していた桃園寮・幼稚園・小学校校地は学園に寄贈されました。
一九六二(昭和37)年に、森本厚吉博士銅像除幕式、一九六四(昭和39)年には浅間高原寮が完成(二〇一一(平成23)年売却)と学園は充実期を迎えました。

三. 東京文化、創立八十周年へ

一九六六(昭和41)年、森本静子学園長が逝去(享年八十一歳)。この年は、創立四十周年記念学園祭が行われた年でもありました。

に指定され、その五年後、東京文化医学技術学校は東京文化医学技術専門学校に改称されます。
一九七七(昭和52)年、学園創立五十周年記念式典が開催され、皆様おなじみの「学園五十年史」が出版されました。
昭和50年代は校舎に関するできごとが多く、一九七八(昭和53)年に中学・高校一〇号館校舎が完成(現在は新一〇号館として立て直され、中学校・アフタースクールが使用)、一九七九(昭和54)年には小学校・幼稚園校舎が杉並区和田一丁目に完成し、移転しました。
一九八〇(昭和55)年は同窓会五十周年、一九八二(昭和57)年には短期大学が「文化生活」を復刊(第21号)するとともに、医学技術専門学校が創立三十周年を迎えました。
続く昭和60年代は一九八五(昭和60)年の創立六十周年記念事業計画(短期大学図書館・桃園校舎・森本記念館の新築)発表で始まりました。一九八七(昭和62)年、短大二号館を増築、ビジネスアカデミー校舎が完成しました。東京文化学園ビジネスアカデミーは一九九五(平成7)年まで卒業生を送り出しました。
平成に入り、一九九一(平成3)年から短期大学卒業生に「準学士」の称号が授与されるようになり、一九九五(平成7)

年からは医学技術専門学校の卒業生に「専門士(医療専門課程)」の称号が授与されるようになりました。
一九九六(平成8)年創立七十周年記念事業開始。森本厚吉先生像が今の位置(正門前)に移設され、新渡戸稲造先生の胸像が設立されました。
中庭がガーデンと呼ばれるようになった一九九七(平成9)年、同窓会では高等女学校部会・高等学校部会の統合が行われ、学園ホームページが開設されました。
二〇〇〇(平成12)年、東京文化短期大学が五十周年を迎えました。
二十一世紀の初めは、短大の動きが活発になります。二〇〇二(平成14)年、短期大学家政科は生活学科へ名称が変わり、医学技術専門学校が共学になりました。二〇〇三(平成15)年には短期大学生活学科も共学化、生活福祉専攻を新設(二〇一〇(平成22)年廃止)。翌二〇一〇(平成16)年には児童生活専攻、専攻科児童生活専攻が、二〇一六(平成18)年には臨床検査学科が新設されました。前後しますが、二〇一五(平成17)年から短期大学卒業生に「短期大学士」の学位が授与されています。
二〇一七(平成19)年、東京文化学園は創立八十周年記念式典を行いました。

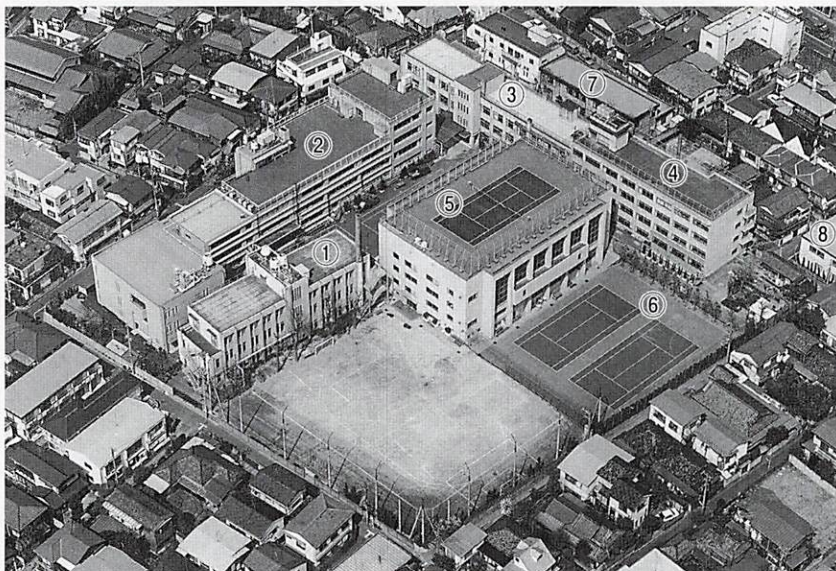
四・新渡戸文化、 新たな歴史へ

二〇〇八(平成20)年、法人
名を学校法人新渡戸文化学園に

変更し、二〇一〇(平成22)年、
新渡戸文化短期大学・新渡戸文
化高等学校・新渡戸文化中学
校・新渡戸文化小学校・新渡戸
文化幼稚園と改称しました。同



2009(平成21)年は校庭が天然芝生化され、豊かな緑は日々子どもたちの活動を支えています。(上の写真はドローン空撮。下の白黒写真は1986(昭和61)年体育館落成後の航空写真。)



①1号館(新渡戸記念館・短大) ②2号館(短大・高・法人事務局) ③6号館
(小中セカンダリー〔5～9年生]) ④9号館(小中プライマリー〔1～4年生])
⑤7号館(体育館) ⑥幼稚園(子ども園) 元テニスコート ⑦10号館(アフター
スクール、小中) 元中高図書室・作法室 ⑧11号館(同窓会室・小中)

窓生には、次の時代を感じさせる
変化だったのではないでしょ
うか。
改称と時期を同じくして、小
学校は2クラス化し、杉並区和
田から中野区本町に戻りました。
二〇一〇(平成23)年、小学
校に続き、幼稚園も中野区本町
の新園舎に移りました。杉並区
和田のときから始めていた長時
間保育を一層充実させる子ども
園となり、現在に至っています。

小学校・幼稚園ともに移転した
ことから和田校地は売却されま
した。この年は先にも少し出て
きた、十号館が建て替えられた
年でもあります。新しくなった
十号館では、小中学校とアフ
タースクールが多彩な活動が行
っています。
二〇一二(平成24)年、幼稚
園(子ども園)が二歳児保育を
開始しました。同窓会室と子ど
も園は校地の中でお隣同士です

ので、同窓会にいらつしやると
きに、子ども達のかわいらしい
姿を見かけた方も多いことでは
よう。
学園で唯一の女子校だった中
高も、二〇一四(平成26)年に
中学校が、この春からは高等学
校も新入生から共学になりました。

そして、二〇一七(平成29)
年度からは小学校・中学校が九
年間の教育を一体化して行うよ
うになります。「小中学校」の一
・四年生はプライマリー、五・
九年生はセカンダリーです。
女子のみの高等学院から始ま
った学園は、幼稚園(子ども
園)・小中学校・アフタースクー
ル・高等学校・短期大学(生活
学科 食物栄養専攻・児童生活
専攻・児童生活専攻専攻科、臨
床検査学科)からなる学園とし
て、節目の年を迎えています。

編集後記

同窓会総会での学園創立90周
年のお祝いの会の準備中、急遽
「泉」の特別号の発行が決定さ
れた。定期号とはイメージの異
なる紙面を目指す。編集会議に
は、五十嵐佳寿子、榎本良子、
橋本恵理子の各氏が参加。学園
90年の歩みのまとめは、森本
みぎわ氏。その他、記事の執筆
者、皆様のご協力に感謝。